

対話

現場の先生のための 「進路指導」相談講座 を始める

— 第6回 —

取材・文／塚田智恵美
撮影／平野 愛

監修&アドバイス



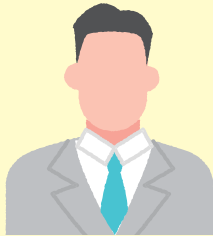
追手門学院大学心理学部
教授
三川俊樹先生

追手門学院大学心理学部教授。カウンセリング心理学専攻。大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了(学術修士)。スーパーバイザーなどとして活躍。2023年5月まで日本キャリア・カウンセリング学会で理事・SV委員長を務めた。

カウンセリングの領域では、カウンセラーが自身の担当する個別のケースについて、専門家や指導官に話し、自身のカウンセリングの過程や問題点を振り返ることで、よりよいカウンセリングのあり方を模索する手法があります*。この連載ではキャリア・カウンセリングの専門家である三川先生と現場の先生方の対話を通じて、現場の先生ご自身が「よりよい進路指導のあり方」を考えていく様子をレポートします。

*「スーパービジョン」という手法。事例をもつカウンセラー(スーパーバイザー)と指導者(スーパーバイザー)で行う。

CASE.6



三者面談を通じて、生徒と保護者の合意形成をするのが年々難しくなっています。面談の前に、**生徒の本音や思いをうまく引き出し、言語化させたいのですが…。**

公立高校 澤口先生(仮名) 40代前半

生徒と保護者の間で進路観のギャップが年々広がっており、最近、三者面談をうまく成立させるのが難しくなっています。私としては、できるだけ生徒の進路選択を応援してあげたいです。保護者に対して、生徒が思いをしっかりと伝えられるよう、言語化の支援が必要だと考えています。

三者面談は
意見を一致させる場？

澤口 近年、総合的な探究の時間等を通じて、生徒自身が「自分のありたい姿」を考える機会が増えています。A→導入における職業の変容や、年功序列・終身雇用などの働き方の変容なども、生徒のほうで理解を深めているようです。一方、保護者の「就職を重視する傾向はさほど変わりません。そんななか、家庭での対話不足もあってか、三者面談の時間内に生徒がうまく保護者を説得できず、合意に至らないことも多いのです。

三川 なるほど。つまり澤口先生は、三者面談では最終的に、生徒と保護者の意見を「一致させなければいけない、とお考えなのではないですか？

澤口 そう思っていました…。

三川 それは本当に必要なのでしょうかね。

澤口 うーん…確かに誰かから「三者面談では、生徒と保護者の意見を一致させなさい」と指導されたことはないですね。でも**教員としては、それを求められているというように感じていました。**

三川 例えば、どんな場面ですか？ もう少しお聞きしてもよいでしょうか。

澤口 はい。例えばある生徒は、自分のやりたいことがあり、みずからネットでいろいろ調べて志望校を決めていました。しかし保護者としては「それを学んだところで、本当に就職できるのか？」と不安な様子。教員としては生徒が生徒なりに真剣に考えているのがわかるのですが、その思いがなかなか保護者に伝わらず、一方、保護者の方も「頭ごなしに、やりたいことを否定したいわけではないのだが、うちの子は現実が見えていないのでは」と困惑。そのように対立したときに、**生徒と保護者の両方から「先生、早く良い正解を教えてください」というような視線を感じるのです。**ちゃんと正解が出せるかどうか、試されているような。

三川 直接聞いたのですか？

澤口 いえ、「三者面談の場に何を求めていますか？ 私に何を期待していますか？」と聞くわけにはいかないかと思つて。

三川 なぜ「何を求めているか」を直接聞いてはいけないのでしょうか。私がお聞きになれば良いのではと思いましたが…。

澤口 確かにそうです。なぜ聞けないのかな…。自分のプライドがあるのかも…。また、周りのベテランの先生方から「1を聞いて10を想像できるような力を身につけなさい」と言われてきたことも影響している

目の前にいる相手の気持ちを察する前に、聞くこと

と思います。

■なるほど、プライドや周りの目が「率直に聞く」ということを妨げてきたのかもかもしれませんね。

相手の気持ちを「想像」してはいけない

■ところで私はカウンセリングを専門にしていますが、**「教えた子には「人の気持ちを想像してはいけない」と伝えてきました。想像したり推測したりして、わかつた気になつてはいけない。せつかく目の前に相手がいるのだから」**今、あなたはこういう気持ちですか？と聞いて、対話をすればいいのだと。

■ああ、おつしやる通りですね。私は「聞かずに理解できるようにならなければいけない」と思い込んでいたようです。**三者面談も本来は意見の一致ではなく、それぞれの意見を知り、対話するための場なのかもしれない。**

■親の考えと子どもの考えが一致するのは、難しいことです。でも、それぞれが異なる価値観や意見をもっていることを、まず「聞けた」。それが第一歩になります。ひとつしたら三者面談というのは初めて親子が向き合う、絶対のチャンスかもしれないですね。そうは言っても先生方は、最終的には具体的な進路の話につなげなければいけない、というお立場でしょうか。

■いえ、それ以前に、生徒に対しても保護者に対しても「聞く」ということができていると感じました。少し話を聞いたただ

けで、勝手に私が生徒の気持ちを想像し、頭の中でストーリーを作っていたところもあるかもしれません。率直に「聞く」というのは案外難しいものです。何が工夫できることはないでしょうか？

■私たちには「察し」の文化があり、いちいち聞かなくても、発せられた言葉や表情から多くを察することが正しいと思ひ込みがちです。でも本当は、いちいち聞かないとわからないものなんです。例えば、ある子どもが「私は友達が少ないんです」と言ってきたとします。つい「それは寂しいね」なんて返してしまいがちですが、ひよとしたらその子は「以前は友達に振り回されてばかりで疲れていたけれど、最近友達が少ないなって、やっと自分が取り戻せた」ということを言いたいのかもしれません。それを「寂しいね」と決めつけた時点で、**「おそろく子どもは「ああ、この人、わかつたいな」とかつかりするでしょう。」**

■確かに…。そこで子どものほうから話を打ち切ってしまうそうです。**「三」** そうですよ。これを「それって寂しいということ？」と聞くだけで、対話が続くのです。「ミニニケーションには誤解やずれはつきものです。大事なのは、**「ずれたこと」**に気づいて、軌道修正していく力。それが**「それが対話の力とも言えます。」**だから、あま

三者面談は「答え」を出す場か？ 向き合い、聞いて、考える

り難しく考えすぎず、自分が「相手はこういうことを言いたいのかな」と理解したことを、「それってあなたはこういうことを言いたいの？」と確認していけばいいのです。

■なるほど。勝手に決めつけることなく、相手の話を受け止めることは、とても大切ですよ。そのうえで「このところがわからないから、もう少し話してくれませんか？」とどうしてそう思うかと、率直に聞いてみればいいですね。

■澤口先生は「面談前に、生徒の思いを引き出したい」とお悩みでしたが、**「私は面談の前ではなく後に生徒に感じたことや気づいたことを書いてもらうほうが良いと思います。」**思ったことが伝えられなかった「親が『いいね』と言ってくれたのが嬉しかった」など、三者面談を通じた生徒の気づきを深めていく。それが自分の行動や気持ちを取り返し、言語化していくリフレクションの力につながっていくはずですよ。

■思えば私には「三者面談で『結果』を出さなければいけない」という使命感があったのかもしれない。それが担当の腕の見せ所だと。そうではなく、**「三者面談をきっかけに考えを深めていけばいいのだと、対話を通じて考えが大きく変わりました。」**まずは生徒と保護者に率直に「聞く」ことを意識したいと思います。

現場の先生の気づき

生徒にも自分にも「聞く力」で振り返りを



自分のなかにある、さまざまな先入観に気づきました。

「三者面談は合意形成の場」「教師は正解を示す存在」「何を求めているのか、想像できるようにならなければいけない」「三者面談までに生徒の思いの言語化をさせなければいけない」…。知らず知らずのうちに思考の前提になつていくことがたくさんあり「本当にそうだろうか？」と自分自身に問う時間になりました。

三川先生は対話中、私が話したことに対して「それはこういうことでしょうか？」「私にはこのように聞こえますが、どうですか？」と、私を理解しようとして、さまざまな問いかけをくださいました。これがまさに聞く力だと体感したような感覚です。指導ではなく、ただ、聞いてもらうことの大切さや効力を、身をもって感じました。また教員として働いていて、話を聞いてもらう時間、自分の気持ちを振り返る時間が不足していたような気がします。忙しい日々ではありますが、生徒の話をしっかり聞くためにも、無意識に当たり前になつてしまっていることを振り返り、前提を見直す時間や機会をつくりたいです。

語ることで気づく。その積み重ねが成長をもたらす

心が育つ「聞く力」と、気をつけたい態度

今回の対話では、生徒の思いを「聞く力」と、対話を妨げる決めつけや態度に話が及びました。聞くときに気をつけたい態度や、心が育つ対話に近づくためのポイントについて、三川先生に聞きました。

生徒の話を書くときに よく見られる、気をつけたいNG態度



これまで自分なりにがんばってきたんですけど、試験に合格できるでしょうか…。

NG
例1

「安易な保証」

あなたなら大丈夫！



(でも…、不安です…)

▶相手の不安や心配の背景にある状況を全く理解しないまま、「大丈夫！」という言葉を繰り返すことは避けたい。

NG
例2

「気持ちの否定」

心配しなくていいよ！



(そうかなあ…)

▶不安や心配などの否定的な感情は持たないほうが良いと考えてしまい、つい「心配するな!」とその人の気持ちを否定しがち。

NG
例3

「泣き面に蜂」

今さら心配したところでどうにもならないでしょ!



(それはそうだけど…)

▶本人の不安や心配に対して、さらに危機感を募らせるような発言をしてしまう例。悲観的な気持ちにさせてしまう。

三川先生からのメッセージ

教員自身のリフレクション力が 「聞く力」にも通じている

今回対話した澤口先生は、生徒や保護者との関わり方を見直されているように感じました。無意識のうちにとらわれていたことに気づき、少し自由になられたのではと思います。このような対話を通じて気づいたことや考えたことは、ぜひご自身でメモしておくことをおすすめします。なぜなら先生自身のリフレクションの力を高めていくことが、聞く力、そして「聞く」ことを超えて相手を理解しようとする「聴く力」の向上にも通じるからです。「他者理解は自己理解」と、よく言います。自分としっかり向き合い、自分の感じていることが理解できるようになると、おのずと聞く態度や問いかけにも変化が現れるものです。

人は語ることによって気づき、気づくことによってみずからの考えや気持ちを統制し、自分自身の行動を修正することができるようになります。その積み重ねが、心の成長や発達をもたらすのです。だからこそカウンセラーは「聞く」「受け止める」というコミュニケーションを通じて、一人ひとりの「心の動き」を生み出すように、意図的に働きかけています。「教師にカウンセリングの技術は必要ない」と考える方もいらっしゃるかもしれませんが、カウンセリングとは「人がよりよく生きるためのサポート」です。子どもや保護者の話を聞くときにも、役立てることができるのではないのでしょうか。

子どもや保護者の話を聞かず、安易な受け応えに終始するなど、対話において気をつけたい態度や行動は少なくありません。左に、簡単な例を紹介します。このような態度を避けて、よく聞くためにはどうすれば良いのでしょうか。私なら、「これまでも自分なりにがんばってきたのに、試験が目前に迫って、心配になったのですね」などと、まずは



生徒の話を書いて、自分が受け止めたことを伝えてみるかもしれません。まず聞き、受け止めること。その先に「心が育つ対話」があります。